

## 東海の古代

第267号 2022年11月

会長 : 畑田寿一  
 編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp  
 HP : http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm

## 卑弥呼の時代の紀年鏡

—宮市 畑田 寿一—

3世紀前半の卑弥呼と同世代の紀年を持つ鏡は全国で10面程度ある。しかし、大半が他の出土品から4世紀とされており、100年程度の差がある。

その中で実際の同世代に存在した可能性が高い出雲の神原神社古墳<sup>かんばらしんじや</sup>を中心にその時代を検証してみたい。

## 1 3世紀前半の紀年を持つ鏡

卑弥呼の時代の年号が記された鏡には次のものがある。年号に記された時代にこの鏡が存在したとすれば、日本列島は魏と呉との交流があり、その交流は日本全土に広がっていたことになる。

紀年号銘	西暦	鏡の種類	出土場所
魏 青龍3年	235	方格規矩四神鏡	大田南墳(丹後), 安満宮山墳(高槻)
魏 景初3年	239	三角縁神獸鏡	神原神社墳(出雲)
		平縁神獸鏡	和泉黄金塚墳(和泉)
魏 景初4年	240	斜縁盤龍鏡	広峰墳(福知山), 持田墳(宮崎西都)
魏 正始元年		三角縁神獸鏡	竹島御家老屋敷墳(周南), 蟹沢墳(高崎) 森尾墳(富岡)
呉 赤烏元年	238	平縁神獸鏡	鳥居原狐塚墳(山梨), 安倉高塚墳(宝塚)
晋 元康□年	291-9	平縁神獸鏡	上狛墳(木津川)

しかし、銘文などを比較してみると、神原神社鏡がオリジナルで、他の鏡は模倣の可能性が高いと宮崎大学の福宿孝夫教授は指摘されており、仮に神原神社墳の鏡が卑弥呼の時代であっても、他は4世紀中頃と考えられる。

鏡	銘文
神原神社墳鏡	景初三年 陳是作、鏡自有経 述本、是京師杜地之出。吏人詔之、位至三公、母人詔之、保子宜孫。寿如金石兮。
黄金塚墳鏡	景初三年、陳是作、・・詔。・・詔之、保子宜孫
蟹沢墳鏡	(正)始元年、陳是作鏡、自有経。迷本、自荊師杜地命出。寿如金石。保子(宜孫)。< 述 > < 京 >
広峰墳鏡	景初四年、五月丙午之日、陳是作鏡。吏人詔之、位至三公、母人詔之、保子宜孫。寿如金石兮。

更に、中国では「位至三公」は黄河流域、「平縁神獸鏡」は長江流域で出土することから、三角縁神獸鏡を魏国製とすることを疑問視する学者もあり、決着をみていない。魏では、方格規矩鏡・内行花文鏡などが中心であり、倭への伝来もこれを中心に考えるべきでは無いか。

## 2 出雲神原神社墳の概要

神原神社遺跡は斐伊川の中流域にあり、加茂岩倉遺跡の南東の平野部に存在する。発掘調査報告書に記載された遺物の内、時代を推定できそうな遺物を挙げると次のようになる。

項目	出土状況
墳墓の形態	方墳 30 x 25 m
石室	竪穴式石室 北5度西向き 長さ6m 粘土床
棺	木棺 ベンガラと朱を混ぜたものが出土
鏡	景初3年の銘を持つ
鉄製品	農機具、太刀（鉄製素棺頭）、鉄剣、鉄鏃（36本）
土器	小谷式土師器（布留I式と同時代）
その他	ウルシ

### (1) 土器による時代推定

箸墓古墳を卑弥呼の墓と主張するあまり、土器編年が研究者により大きく異なるようになってしまったが、話を原点に戻すと、次の年代想定が最も妥当性を持つと思われる。

この年代想定に拠れば、小谷式土器は布留I式土器と同時代と考えられるので、4世紀中頃となる。

3世紀後半	4世紀前半	4世紀後半	5世紀前半

(出典：邪馬台国の会294回講演会)

### (2) 竪穴式石室の時代推定

土器同様に竪穴式石室の時代についても諸説が存在する。一般には3世紀後半から4世紀とされているが、長大石室、粘土床などの特徴から4世紀初め頃と考えられる。

以上の状況からこの古墳は4世紀頃の構築と考えられる。出土した鏡は先祖伝来(伝世)のもので、それを埋納したとも考えられるが、これを認めると古代史が成り立たなくなるので、後世の国産説に賛同したい。

ただし、鏡の年号が卑弥呼が魏に使者を送った時期に集中することから、**4世紀の倭国では卑弥呼が使者を送ったことを知っていた**。しかし、2代目明帝が景初3年正月1日に死去後、幼い息子の斉帝が擁立される正始元年まで約1年間の空白期間があることから、倭国での年号の認識に混乱が興り、各種の年号を持つ鏡が造られたと考えられる。

この状況は呉鏡においても同様であり、須恵器とともに出土する等、紀年を鏡の作成時期とすることは考え難い。

中国年号	西暦	魏志倭人伝での記述（554年成立）
景初2年6月	238	卑弥呼、難升米らを帯方郡に送る
景初2年12月	238	魏王、卑弥呼や難升米に位授け、返礼の詔をだす
正始元年	240	帯方郡の使いが返礼品を届ける。卑弥呼礼状を出す。

## 3 銅鏡からみるヤマトの後進性

卑弥呼の時代と考えられている銅鏡の出土分布を眺めると、九州の福岡が57%を占めている。一方、近畿は4面に留まり、奈良盆地では出土していない。

(ただし、邪馬台国の会ではホケノ山古墳などを4世紀とみている。)

前述のように銅鏡の年代想定には疑問はあるが、出土が極端に少ないようでは卑弥呼ヤマト説自体が成り立っていない証明であろう。

地域	出土数	県別出土数
九州	28	福岡(20) 佐賀(4) 長崎(2) その他(2)
近畿	4	兵庫(2) 大阪(1) 京都(1)
中国	2	山口(1) 鳥取(1)
中部	1	石川(1)
計	35	

(出典：邪馬台国の会データベース)

#### 4 王侯レベルの下賜品

九州北東部の日田市から出土した金銀錯嵌珠龍文鉄鏡きんぎんさくがんしゆりゆうもんてつきようが魏の曹操の墓の鏡とほぼ同型式である可能性が高いことが話題になっており、九州南東部の串間市からは漢王朝の穀璧が出土している。いずれも紀元1世紀から3世紀頃の品と考えられており、倭の王に下賜された物ではないとする説が有力であるが、市場に出回る品では無い。

3世紀頃、魏と呉は互いに覇権を競い合っており、倭国を味方につける必要があった。その結果、魏と呉は九州の2大勢力に王侯レベルの品を送ったと考えられる。

#### 5 まとめ

期待していた神原神社鏡も、卑弥呼の鏡とするには疑問が多すぎる。三角縁神獣鏡を卑弥呼の鏡とする説は破綻していると考えて良い。3世紀前半の出雲は四方突出型墳墓の時代で、鏡を埋納する時代で無かった。伝播ルートの対馬や壱岐での中心は矛であり、鏡の出土は少なく、三角縁神獣鏡の類は殆ど出土していない。また中国に比べて日本列島に存在する鏡のコピー率が異常に高いとする指摘もあり、何が本物であるか判別が難しい状況にある。

結局、以上の疑問を解消するシナリオを作ると以下のようなになる。

魏は倭の使者に対して豪華な鉄鏡を1面のみ渡し、他は帯方郡での作成を命じた。もたらされた鏡の種類は当時魏で作られた鏡を中心に考えるべきであろう。その後、徐州では倭国での鏡ブームに目を付け、中国の鏡を大量にコピーして日本に出荷した。一方、国内では呉からの渡来人が呉鏡と魏鏡の文様をミックスした三角縁神獣鏡を考案して、当時後進地であった近畿地方に売り捌いた。その結果が現在の鏡の分布状況である。

荒唐無稽の誹りは免れないが、現在の状況の打破には、思い切った新しい観点が必要では無いか。

## 三角縁神獣鏡はどこで造られたか？

刈谷市 酒井 誠

### 1 今までの考え方の問題点

過去の何年間も三角縁神獣鏡は、ヤマト王権が魏王朝より授与されて、各地の豪族に分配してきたという考え方が定着してきた。その根底には、『魏志』倭人伝中に存在する、邪馬台国の卑弥呼が、魏王朝から鏡を100枚授与されたという一文が流れている。しかも、京都大学の小林行雄氏の権力にもものを言わせた考え方に意見することなく、多くの考古学研究者は半ばこれに従ってきたのである。中には、私のようにヤマト王権の存在を否定する人もいたでしょうが、鏡だけでなく青銅器や鉄などの金属に対しては、ヤマト王権が一括して輸入して各地の豪族に分配してきたような考えのベクトルが大勢を占めてきた。しかし、次第に鏡や青銅器を受け取る側の研究が進み、国内にもたらされるルートの存在や国内生産に目を向ける研究者も増えてきた。日本列島にもたらされるものはすべてヤマト

王権が一括して受け取り、国内で分配するといった考え方がいかに無謀なことか気づいて来たのであると思う。ここで問題とする3世紀後半から4世紀中旬までの話で、考古学的にとらえて日本国内に統一王朝が存在していたという証拠などないのだ。

今、島根大学の岩本崇氏（京都大学出身）の『三角縁神獸鏡と古墳時代の社会』（六一書房、2020年）という本を手にとって見ているのだが、この時代にはヤマト王権が日本全体を統治して鏡を分配していたという大前提の上で話が進んでいるのだ。もうお亡くなりになった小林行雄氏の考えから少しも脱却出来ていない。私は、大陸から金属材料を運んでくる集団や、国内でその材料を用いて金属製品を製作した多くの集団があって、日本の国が成り立っており、一つの国によって統治されていたという考えにはとてもついて行けない。

考古学者の森浩一氏は、紫金山古墳出土の三角縁神獸鏡は、鈕の孔が鑄造したままで研磨などの修正の作業を加えてない、「**全て鑄放し**」で、「**鈕の孔が全くふさがっている物も**」あったというのである。魏の銅鏡は、孔が確かに長方形の形をしており、国内の三角縁神獸鏡も長方形の物があるが、鑄型から外したままで、その穴を紐がうまく通り抜けずに、途中で紐が切れてしまい通すことすらできない物が多いのである。魏の国から銅鏡を授与されたのならば、紫の紐が付いた状態で渡されたのではないのか。

## 2 今までの三角縁神獸鏡の編年（捉え方）

(1) 舶載鏡：239年（景初3年）を起点として（私はそれも疑っている。）～260年代まで

(2) 仿製鏡：ア・・・325年頃～375年ごろ、イ・・・275年ごろ～

(3) 製作地：ア：舶倭区分説、イ：すべてを倭製とする倭製説

ウ：中国の工人が渡来して日本国内で製作に当たったとする工人渡來說

エ：すべてが中国製とみる中国製説

オ：特別な鑄型で造られたとする特別鑄型説（特鑄説、小林1982）

## 3 NPO法人工芸文化研究所の実践的研究

工芸文化研究所は、工芸文化財や歴史に関する研究、工芸技術の復元研究を行っているNPO法人で、その所長は鈴木勉氏である。その鈴木氏の著書『三角縁神獸鏡・同範〈型〉鏡論の向こうに』（雄山閣、2016年）では、各種の金属製品を古代人になったつもりで実際に作り上げるところから研究を進めており、この本を読み、目から鱗が落ちる気持ちであった。以下、この著作の内容を参考にしながら三角縁神獸鏡に関する私説を述べる。

### (1) 同範鏡の意味するところ

私は、銅鐸のところで勉強したように、同範というのは、同じ鑄型で何個も全く同じ銅鐸ができるものだと考えていた。同じ鑄型から作るわけなので、次第に鑄型の模様がかすれたり欠けたりして、同じ鑄型でも終わりの方の銅鐸は模様ははっきりしないのはわかる。しかし、銅鏡の同範鏡というのは、そもそもまともな鑄型が見つかっていないし、このため、何度、鑄型を使ったのかさえ分かっていない。

私は、同じ大きさの鑄型で模様が違っても同範鏡であると考えている。



（峯遺跡出土・筑前町立教育委員会より）



（新作の鑄型・鄂州博物館より）

## (2) 真土型鑄造法

真土は、川砂に粘土を混ぜ、700℃～800℃で素焼きしたものを、再び砕いて使用箇所に応じて篩にかけ、粘結剤として粘土汁（埴汁）を混ぜて練って使用する。その材料を木の枠の中で上の写真のように四角の形に作って、鑄型の元を作る。

私は、もっと柔らかいうちに、墓石のように長いものを作って、よく切れる刀のようなもので切断して、上と同じ形状のものを作ったと考えている。（発掘では見つかっていない。）そうして、まだ半乾きの状態で、工人が鑄型の模様を作っていく。工人は、地域によって使う道具も異なり、技術もかなりの差が出てくる。模様が仕上がったら、天日干しにする。鑄肌になる部分には、ごく微細な粒子の真土を撒く。通気性やひび割れを防止する目的で和紙の繊維を混ぜたものを加える。二つの鑄型の境目にも真土を塗り付ける。（玉土ともいう。）

ここが工人の腕の見せ所で、乾きすぎるとひび割れが入り、銅鏡にもひび割れの模様が入ってしまい、乾きが悪いと、青銅を湯口から注ぐときに水分が残っているので、水蒸気があふれ出し大げがをする。

## (3) 鑄型から銅鏡を外す時の難しさ

原則として、表と背の部分の鑄型を二つ合わせて、その接合面に沿って湯口を作り、そこから青銅を流し込み、青銅が固まったら鑄型を外すのであるが、ここが最大に難しいところであろう。プッチンプリンを皿に受けて、皿の上で食べる時は、容器から取り出さなくてはならない。その時に、容器の裏側にある瘤を折って、空気穴を作るので、中身が皿の上に落ちてくるのである。この突起があるからこそ中身が取り出せるのである。しかし、銅鏡の場合は、鑄型に青銅がくっついて、プリン以上に模様が深いために、取り出せない。無理をすると本来銅鏡の背に浮かび上がる模様が傷ついてしまうことになりかねない。また、とてつもなく大きな突起では、折れ曲がって鑄型の方に埋没してしまう。

次に掲げた写真の銅鏡を見ても、外周をよく見ると三角形を描いている。これが四角形では、鑄型からうまく取り出せない。盛り上がっているところも、極端な高さの変化はない。それでも簡単には取り出せない。プッチンプリンの仕組みはないのである。その代わりにできることは、鑄型を裏面から丁寧に砕くことしかなく、したがって完全な鑄型は残りにくいことになる。



## (4) 出吹きと鑄放し

各地区に存在した青銅製品の工人技術集団は、「出吹き」といって、豪族に呼ばれて出向き、その地で青銅製品を作るのである。奈良県天理市の黒塚古墳出土の三角縁神獣鏡は、鑄型から外したまま加工されていない「鑄放し」のものが多く、近くに工人技術集団がいたと考えられる。一方、京都府木津市にある椿井大塚山古墳出土のものは、黒塚の銅鏡に比べ後のものになるので遠方で製作され運ばれたと思われる。

## (5) 三角縁神獣鏡には、同じものは一つもない。

三角縁神獣鏡は、実にたくさん出土しているが、微妙に少しずつ模様が違う。模様はい

くつかのパターンが造られており、それらを組み合わせて図案が形づくられる。  
そうして鑄型は一つずつ手作りで成形される。

#### (6) 鑄型から銅鏡を外す作業

この鑄型から銅鏡を外すことが最大の難所である。最初の鑄型から作る銅鏡は、仕上がりもまだきれいであろう。鑄型の境目にできるバリは取り除く。二つ目の同じ銅鏡を作るときは、「踏み返し」といって、真土が柔らかいうちに最初に作った銅鏡を押さえつけて、表面に模様を移しとる。うまく転写できないところは、ヘラなどを使って修復する。そして、最初の行程に戻る。作れば作るほど模様が不鮮明になることは当然である。出来の悪いところはヤスリをかけて修正する。工人の能力によって出来栄えが違ってくる。

#### 4 まとめ

- ① 銅鏡を鑄型から取り出す際には、銅鏡を傷つけないように鑄型を砕かなければならず、このために完形の鑄型が後世になかなか残らないのではないかとと思われる。
- ② 鑄型から外して最初に作られた銅鏡は、模様が鮮明だが、「踏み返し」で作られた銅鏡は、ヤスリなどによる多くの修正作業がされている。
- ③ 同じ古墳からは同じ大きさの銅鏡が出土する傾向がある。これは同じ形式の鑄型で造られたもので、工人のアイデアでそのデザインをいろいろと替えたと思われる。
- ④ 全国の「<sup>いばなし</sup>鑄放し」の銅鏡が多く出土する古墳の周辺には、工人技術集団が存在したと考えられ、三角縁神獸鏡のすべてがヤマトで造られ分配されたとは思われない。
- ⑤ 三角縁神獸鏡は魏からもたらされた銅鏡ではなく、これは日本の工人技術集団により造られたものとする。

## 中平銘大刀の来歴について

東海市 大島 秀雄

### 1 はじめに

4世紀後半の築造とされる奈良県天理市の東大寺山古墳から出土した国宝の長さ約110cmの鉄刀には、金象嵌で「中平□年五月丙午造作文刀百練清剛上應星宿下辟不祥」の24文字（推定文字を含む）が入れられており、その意味は概ね、「中平□年五月丙午の日、銘文を入れた刀を造った。百練鉄の刀であるから、天上では神様のお役に立つであろうし、下界では禍ごとを避けることができる。」と解釈されています。

一般的には全長が46～60cm以上の物を大刀と言い、この大刀については、一部から国産説が出されていますが、象嵌が銀を精錬で完全に除去した純金であったことから、高度な技術で作られた中国製であるとみられていますので、この中平銘大刀がどのような経緯で東大寺山古墳に持ち込まれたのかを推測してみたいと思います。

### 2. 中平銘大刀の特徴

この大刀に装着されていた環頭は鳥文飾りであり、刀身は内反りしていて日本の前期古墳に特有の直刀とは違い、中平の年号が示すように中国の後漢製とみられます。また、中国製の刀身に日本で改造し、日本式の環頭を付したものと推定されています。

銘文の「百練」の文字は、石上神宮の七支刀や稲荷山古墳出土鉄剣にも刻まれています。従来は百回折り返し鍛錬したと理解されてきましたが、これは普通の鉄ではなくて、中国産の良質なハガネを意味するとされ、中国産の百練鉄の優秀さを倭人に知らしめ、拡販したいとの思惑があったのではないかと意見があります。

また、江田船山古墳出土の大刀には「八十練」の文字が刻まれています。これには国産の意味が込められているのかもしれませんが。

### 3. 中平銘大刀は卑弥呼へ

中平とは後漢の靈帝の年号で西暦184～189年を指し、『魏志』倭人伝がいう「倭国の乱」が終結した時期の2世紀末頃です。従って、この刀は「倭国の乱」終結後に中国からもたらされたものであると考えられています。

仁藤敦史氏は『東アジア世界の成立』（荒野泰典ほか編、吉川弘文館、2010年）に所収の「邪馬台国からヤマト王権へ」の論考で、倭国の乱が収束した直後の「中平」年間に造られた鉄剣が、中国あるいは遼東半島を支配していた公孫氏から、共立されたばかりの卑弥呼に、その地位を承認する意味で剣が与えられものと考えられるとしています。

また、糸島市の平原遺跡の副葬品には被葬者の頭部に横たえてあった長さ80.6cmの内反りの鉄製素環頭大刀があり、中平銘大刀とほぼ同時期に中国から入手した可能性があります。さらに糸島市前原東にある上町向原遺跡からは長さ120cmの1世紀後半～2世紀前半に中国産の鉄鉱石で作られた素環頭大刀が出土しており、これは『魏志』倭人伝で正始元年（240年）に卑弥呼に下賜された5尺刀2口（5尺＝115cm）の1口の可能性があります、もう1口は東大寺山古墳に埋葬されていたやや短い110cmの中平銘大刀かもしれません。

環頭が倭国で付け替えられていたならば、全長で5cm程度の差は出てくるのではないのでしょうか。

### 4. 中平銘大刀は邪馬嘉国から伊都国へ

「東海の古代」253号の邪馬台国の位置論に関連した記事で、筆者は卑弥呼がいたのは伊都国に隣接して存在した邪馬嘉国の可能性があるとしたのですが、この伊都国については千戸を有する小国ではあるものの、玄界灘周辺の海外交易の拠点と想定され、後漢から金印を貰った倭奴国も近くに存在していたのではないかと想像しているところです。

倭奴国については、後漢の信任を得て貿易の窓口となり、他の倭の諸国を束ねていたと考えられますが、おそらく他のクニを取りまとめるため、後漢王朝の信任を示す威信財として金印を利用したのであろうとの意見が一部にあり、また金印を利用して中元二年（57年）に金印を拝領時に見学したであろう後漢王朝の北郊祀（『後漢書』本紀、中元二年春正月辛未条に「**初立北郊，祀后土。東夷倭奴國 王遣使奉獻。**」とある。）を真似た祭祀（祭場を金印が発掘された志賀島とすれば、福岡市西区の吉武高木遺跡の北方が志賀島なので、この遺跡付近が倭奴国か）を行い諸国にその権威を示していた倭奴国の力が、後漢王朝の混乱と弱体化に伴い衰退し、倭奴国の盛衰の状況を把握していた隣国の伊都国が主導し、諸国と協力して新しい日神祭祀を行う卑弥呼を盟主として擁立し、小国を分け与えて住ませたのではないかと思います。

『続日本紀』によれば、中国の影響を受けて行われた郊祀の最初は、桓武天皇が延暦4年11月10日に長岡京の南郊にあたる河内国交野郡の柏原（枚方市片鉾本町）にて郊祀が行われたものとされていますので、それ以前にもあったという事でしょう。

そうしますと、異常気象による食料不足に端を発して倭国の乱が発生し、倭奴国滅亡後に隣国の伊都国が主導権を担うことになったと考えます。

すなわち、倭国最大の規模を誇る7万戸の邪馬台国の王が、他国の王と共に擁立した卑弥呼に邪馬台国の王の地位を差し出したと考えるのはあまりにも不自然であり、前述のとおり伊都国王が中心となって伊都国の南部を割いて卑弥呼を女王とする邪馬嘉国を設立したと考えるのが素直です。

そして邪馬嘉国が存在意義を無くして滅亡した時、中国から卑弥呼に下賜された中平銘大刀などが伊都国に渡ったと考えます。

### 5. 伊都国の剣・刀などにまつわる伝承

『古事記』の神産みの段において伊邪那岐命が所持していた十拳剣の名は、「天尾羽張」、別名を「伊都之尾羽張」としていますが、『日本書紀』では「十握剣」とだけ記していて、

固有名詞はありません。

また、『日本書紀』仲哀天皇八年春正月条では、筑紫の伊都県主の先祖である五十迹手が八尺瓊、白銅鏡、十握剣をかけた大きな賢木を船首と船尾に立てて穴門の引島に天皇をお迎えしたという降伏の象徴的な儀礼の話と共に、天皇は五十迹手をほめられて「伊蘇志」とおっしゃり、時の人は五十迹手の本国を伊蘇国と言ひ、今は伊都というのはなまったものという話を載せています。

なお、怡土郡託社郷の郷名は、「正倉院文書 大宝二年筑前国嶋郡川辺里戸籍」の嶋郡大領肥君猪手の父の後妻が宅蘇吉志須弥豆売であることから、託社＝宅蘇＝高祖と想像され、糸島市には志摩岐志の地名もあるので、伊蘇志はかつて糸島市域にあった地名かもしれません。また、宅蘇吉志の吉志は朝鮮半島からの渡来系氏族のカバネとみられます。

## 6. 中平銘大刀は伊都国から大和へ

『日本書紀』の仲哀紀に伊都県主の先祖である五十迹手が引島に天皇を出迎えたという前項の5項の話は、降伏し臣下となった関係の印として刀剣類などの家宝を天皇側に差し出したとの解釈も成り立つ訳で、『古事記』でイザナギが手にした鋭利な名刀の「伊都之尾羽張」とは、卑弥呼が魏から貰った大刀のことであり、剣の神である「伊都之尾羽張神」もこの大刀を題材にした神話なのかもしれません。

尾羽張とは、一般に先が鋭く反ってよく斬れるとも解釈されています。

『日本書紀』神功皇后摂政元年三月条には、九州から帰還する神功皇后や応神を、応神の異母兄の忍熊王らが迎え討とうとしたので、神功皇后は武内宿禰と和珥臣祖の武振熊に命じて忍熊王を討たせたという記事があり、武振熊は仲哀天皇や神功皇后に同行して九州などでも活躍したのでしょう。

もちろんこの戦いは、応神が即位するためには避けて通れない重要な一戦であったことでしょう。そうしますと、4世紀中頃に武振熊は功績によりこの大刀を天皇から拝領し、後裔の和珥氏の先祖が東大寺山古墳に副葬したものと考えられます。

和珥氏は、奈良盆地東北部一帯に広く勢力を持った豪族で、その本拠地は大和国添上郡和邇（現天理市和爾町・櫛本町付近）と添下郡で、東大寺山古墳を含む櫛本古墳群はこの一族の墓所と推定されています。

## 7. おわりに

東大寺山古墳の後漢製中平銘大刀がどのような経緯で天理市までたどり着いたのかを推測してみた訳ですが、卑弥呼が魏から貰った5尺刀2口の1口が伊都国から出土し、もう1口が東大寺山古墳の中平銘大刀と想定され、2口共に邪馬嘉国から伊都国に渡ったものとするならば、卑弥呼が伊都国のすぐ南の邪馬嘉国に住んでいたとしても不思議ではないと考えます。

邪馬嘉国について筆者は「東海の古代」第253号で述べたところですが、『翰苑』の倭国の項では、「邪屈（馬？）伊都傍連斯馬」の見出しに続いて、「廣志曰倭（倭？）國東南陸行五百里到伊都國又南至邪馬嘉國百（自？）女（王脱？）國以北其戸数道里可得略載次斯馬國次・・・」とあり、『魏志』倭人伝のいう7万戸の邪馬台国が面積的に北部九州に入る余地が無いことや、福岡県的那珂川流域には仲哀紀に<sup>なのあがた</sup>灘県や宣化紀に那津官家の名称がみられることから、これらがかつての奴国の領域と考えられること、また『翰苑』の伊都国の近くに邪馬嘉国（女王国）や斯馬（志摩）国があったとする記述を重視すれば、『魏志』倭人伝に1回しか出てこない邪馬台国は倭人伝の挿入句であり、卑弥呼の邪馬嘉国とは切り離して考えるべきではないかとの思いを強くしているところです。

- 次回例会 要注意 日曜日開催です。 ■ 会報誌への投稿（編集担当：石田）  
1 日時 11月20日（日）13時半～ toukaikodai@yahoo.co.jp  
2 場所 名古屋市政資料館 ■ 投稿締切り日 11月28日（月）